

いま読んでおきたい短歌

岡井 隆×穂村 弘

●ドラマティックな女性たち

岡井 正岡子規から島木赤彦までと云っていいか、齋藤茂吉までと云っていいか、大正初年から昭和にかけて、歌壇を制覇したと言われる「アララギ」には、「ほとんど女流がない」というのはどういうことなんだろう」。また「原阿佐緒、柳原白蓮、九条武子のような歌人の位置づけはどうだろう」ということから話を始めましょうか。

白蓮のドラマを、NHKでやっていましたが、白蓮さんというのはドラマ向きだろうと思いますね。柳原伯爵のお嬢さんで、一度離婚して、九州の炭鉱王、伊藤伝右衛門と再婚した。ところが、そこから逃げ出したというとおかしいけれど、伊藤家を去り、宮崎滔天という有名な社会運動家の長

男と一緒にいる。こういう劇的な美女であります。上流階級でお金持ちの所を渡り歩いたとも言えるけれど、これはやっぱり脚本家が書きたくなるでしょうね。「踏絵」という歌集を読みました。いい歌集でした。本扉を開けたところに、十字架に架けられたキリストを下から女の人が見上げている挿絵があります。

踏絵もてためさるる日の来しごと
も歌 反故いただき立てる火の前 柳原白蓮

踏絵をして試されるように、今まで自分が書いてきた歌を抱いて火の前に立っている。自分の信念をどういうふうにするのか、諦めるのか。我々は一生のうち自分の信念を試される機会を何度か経験しますね。



アララギ系の女流というのは、確かに少ないですが、原阿佐緒さんもいるし、今井邦子さんをはじめとして、決していないわけではないですが、何か添え物的だね。白蓮に負けず劣らずドラマチックなのは原阿佐緒。だけど、恋愛関係で世の中を唱導する、あるいは「アララギ」という集団に非常に大きな影響を及ぼす。そういう原さんの一生を考えると、どうも、歌の作品よりもドラマチックな人生のほうを、ドラマに仕立てられているね。事実、何種類かの小説も書かれています。

今井邦子さんも、初めは赤彦の弟子ですが、そこから離れていきます。作品はなかなかいいです。でも、先生とのやりとりとか、そこから離れていくいきさつとか、むしろ、そちらのほうが重要視されている。

異色な人として金田千鶴さんという人がいます。明治三十四年から昭和九年ですから、ちょうど大恐慌のころに、信州の飯田のそばにある山の上に住みました。

村いでてゆく人多く病得てかへり来る
ものは吾のみにあらず 金田千鶴

この人も東京へ出て専門学校に行ったのかな。その後、結核に罹って飯田の山間の村に帰ってそこで一生を終えるわけです。岡麓さんという「アララギ」の選者だった人に師事していました。多くの人が都会に吸収されていって、働いて肺結核になって帰ってくる。そして、農村は日に日に窮乏していく。そういうものに対する社会的な批判ですかね。「アララギ」は、きれいごとを言いながら、結局は松倉米吉など数名の左翼的な人を産んだだけで、そっちはいかなかったけれど、金田千鶴さんは堂々と批判した歌を作った。

穂村 白蓮、原阿佐緒、与謝野晶子にしてもそうですが、戦後という時間しか知らない人間から見ると、信じられないほどドラマチックですね。なぜドラマチックかというところ、姦通罪とか戦争とか結核とか、華族、伯爵とか、全部今はないものですね。もちろん多くはないほうがいいものなのですが、そういうものがないと、皆同じような人生になる。

岡井 なるほど。
穂村 ドラマチック世代の最後は、岡井さ

んです(笑)。岡井さんは、姦通罪や結核ではないけれど、戦争は体験されていらっしやいますね。塚本邦雄さんのように、実人生では経理部などで地味に勤め上げて、短歌の中でドラマチックな人もいれば、岡井さんのように、実人生も短歌もドラマチックで(笑)。

逆に言うと、女性は、ドラマチックでなかった人は、名前が残らなかったんじゃないかと思うんです。いくら作品が良くても、それだけだと見てももらえない。

岡井 そうなんです。たとえば、原阿佐緒の代表的な歌を出してごらんと言われたときに、すらすらと出てくるかというところ、そうでもない。ドラマのほうが先行している。

そこへいくと、今井邦子さんとか、アララギ系ではないけれど若山牧水の奥さんの若山喜志子さん。これはいい歌を作りますね。ドラマで覚えられるのがいいのか、歌で覚えられるのがいいのか、ということですね。

穂村 それは、歌で覚えられたほうが実力だからいいけれど、ドラマにも懂れますよね。自分にまったくなくないと、寂しい感じが

します。

岡井 そうですか。穂村さんもドラマに満ちているんじゃないの？ 実は（笑）。

穂村 いやいや、やっぱり戦前生まれの人は違うなと思います。

岡井 一つひとつのドラマに、どのくらい苦しい踏絵をしたかと、言ってみたって仕方がない。結局、人物じゃなくて作品かなというのが、このごろの私の実感です。作品としてちゃんと残っていないと問題かなと思うのです。

穂村 三ヶ島霞子さんは作品がすばらしくて、最近、再評価されてきましたね。

名も知らぬ小鳥きたりて歌ふとき我も
まだ見ぬ人の恋しき 三ヶ島霞子

ゆくりなく眠りさむれば灯ともれり今
は夜なりと思ふしづけさ

「今は夜なりと思ふしづけさ」なんていうのは、現代でも通用する表現ですよ。

岡井 これは、ご主人の恋人が二階に住んでいたところの歌ですか？

穂村 時期はわかりませんが、ご主人とそ

の恋人が二階に住んでいて自分が下にいるという、なんだかこれでもとんでもない苦しみですね。

岡井 とんでもないですね。今なら、別の家に行けばいいのと思うけれど、お金がないんだよね。だから、二階に旦那とその恋人が住んでいても、一階に住んでいる。この苦しさと言ったら、ないじゃありませんか。

穂村 でもそれによって言葉が研ぎ澄まされていくし、すごい孤独感が三ヶ島霞子の歌にはある。

岡井 いま挙げてきた人の中では、三ヶ島さんがいちばん言葉の上の才能があったんだらうね。二階と下のドラマだけじゃなくて。

穂村 でも、「アララギ」を破門になっちゃったんですよね。原阿佐緒が破門になったことに同情したせいだと聞きましたけれど。

岡井 破門したのは島本赤彦でしょう。

穂村 破門ということ自体、もはやドラマチックです（笑）。

岡井 三ヶ島霞子にしても、原阿佐緒にしても、赤彦のジェラシーかもしれないという説がある。破門なんてね、よほど感情的

なものがないとね。会費を出さなきゃ破門になるかもしれないけれど、金は出しているでしょう。

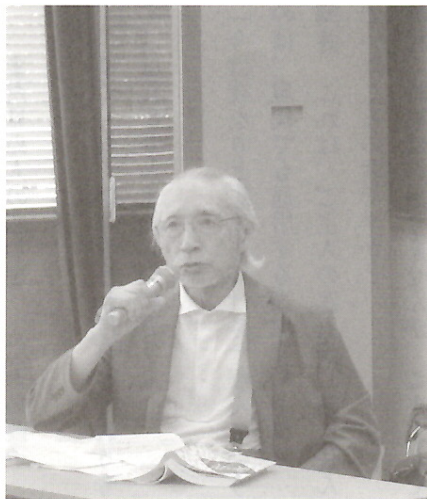
穂村 破門も姦通罪も、それ自体はもちろん羨ましくありませんけれど、たとえば北原白秋の「雪よ林檎の香のごとくふれ」などが姦通罪を背後に負った歌だと言われると、あんな名歌を作るには、やっぱりそれぐらいのものがないといけないのか、と。

岡井 うーん。

穂村 「人間には自分の人生で本当に試されるべきが何度かある」というお話を聞いて、どきっとしたんです。僕は本当に自分の内面で文学的に踏絵を踏まされる、そういう立場になったことがないです。それは決定的に表現を分けるんじゃないかと。

岡井 えー、コメントを避けておきましょう、その点は（笑）。僕は、それがやたらにあつて、あつたこと自体を大変けっこうだとは、ちっとも思っていないから。

穂村 でも、岡井さんの歌はすごく奥行きがある。さりげないことを詠っていても、文体にすごいねりがある。みんなそれに憧れるけれど、いくら真似をしても岡井さんのようには、できないんですよ。岡井



さんがたくさん踏絵を、踏んだり踏まなかったりしてきたことと関係があるんじゃないかって、やっぱり思っちゃうんです。

ご自身としてはどうですか？

岡井 これはもう、そういうふうに詠もうと思えばいくらでも詠めるわけです。

僕は、それとちよつと違って、ここで言葉をはひねってみたいとか、単純に素直にやっついていかないで、「冬の」とやっつて「」を打って、「いや春の海だよ、今は」というふうにもつていく。

歌を作る上で平穩に、普通にすーっといっちゃうのが嫌で、ちよつとどこかでひねりたいんですよ。三十代の前衛短歌のころから続いてしまっている癖、けっしていい

とも思えないような癖が、妙に深読みさせているんじゃないかという感じがしなくもありません。

●前衛短歌の時代

岡井 戦後というのは圧倒的に女性の時代になったかと言うと、これも面白いんだよね。道浦母都子、永井陽子、栗木京子、この辺のところは六〇年代以降に出てきた。そうすると、四五年に終戦になって、六〇年までの十数年間、これは前衛短歌の時代でしょう。

前衛短歌って、あれ、男なんだよね。文学運動っていうのは、だいたい二〜三年で終わるんだけど、前衛短歌は十年くらい続いた。珍しいことです。

塚本邦雄と僕と寺山修司と三人が団結を組んで「よし、やるぞ！」と言って頑張っているように見えるけど、実は踏み潰される毒キノコの立場だった。僕は「踏み潰されないぜ、簡単には」と反抗した。言わば、やつつけられるべき負の存在としての三人が、一所懸命に息を揃えていて、「前衛短歌運動の三人組」とか「御三家」とか

言われてたてまつられたんだね。

穂村 寺山修司の歌、代表歌ですね。

海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは
両手をひろげていたり 寺山修司

普通の人が同じように短歌を作ろうとすると、「海を知らぬわたしの前に麦藁帽の少女は両手をひろげていたり」となる。だって「海を知らない」というのは内面的な問題ですから。自分が海を知らないということはわかるけど、「少女が海を知らない」というのは断定できないことですよ。

もうひとつ。麦藁帽を自分が被っていたら被っている麦藁帽は見えないのですから、「麦藁帽のわれは」はおかしいわけです。外から見ているような視点ですよ。従来、特にアララギ的な短歌の書き方から言うと、完全に逆転してします。

寺山がその後、演劇や映画に行ったことをなんとなく感じさせる。舞台の上に立って「君、そこで麦藁帽を被ってくれないか」とか「少女、出てきて」というように監督をしているようなイメージの歌だと思うんです。



ロミオ洋品店春服の青年像下半身無し
***さらば青春 塚本邦雄

岡井 これは非常に面白い解釈だなあ。僕も解釈したことがあります。「両手をひろげていたり」というのは非常に平凡だけれど、「海ってこんなに広いんだよ」と。「海を知らない」というのは、東北の山のほうの出身の女の子だから、当然海を知らない。だけど、穂村さんの解釈すると「海を知らない」ということも比喩的にとれるわけだし、内面的にもとれる。

穂村 もうひとつ。塚本さんの、たしかに「毒キノコ」と言われれば毒キノコのな歌です。

*印、アスタリスクです。それが三つついて、当時はどんな印象だったのでしょうか。

岡井 この歌は、僕の好みから言うとおんまり好きな歌じゃありません。アスタリスク三個のことよりも、やっぱり青年像に下半身が無いというあたりのことをね。塚本さんは、この「下半身」にはかなり性的なことを込めて使っているんじゃないかと思うけれど、全体のリズムがあまり良くないと思ってるね。

穂村 「何かを暗示しているぞ」という身ぶりは非常に大きいんですよ。ここで暗示されているものが「さらば青春」なんだということはわかるけれど、「下半身が無い」ということが、どうして「さらば青春」なのか。もしかすると、戦争で本当は自分にあるべきだった恋愛が失われたとか、そんなニュアンスでしょうか。

岡井 なるほど、そういうことも考えられるかもしれない。

穂村 例えば、特攻に行つて死んでしまった人は、女性と一度も恋愛をしないまま亡くなった人もあるわけですよ。下半身無し***さらば青春」というような感慨

が、塚本さんにはもしかしたらあるのかな、と思つたんですが。

岡井 当然そういう解釈が出てきてもおかしくないな。

前衛短歌について「あれは何だったんですか？」とよく言われるんですけど、やっぱり、戦後短歌だということを、まず押さえておかなければいけない。

一九四五年に日本が負けて、そして始まった戦後文学の中で長く続いた文学運動はついに無かった。前衛短歌運動だけが十年間続いたわけで、極めて特徴的なひとつです。それはなぜかというと、塚本さん個人を中心とする、あるいは塚本・寺山・岡井という前衛三人組を中心とする運動ではなくて、一般的な、特に「まひる野系」と言っても良い篠弘さんたちもひっくるめて進んでいった運動だったからです。

それから、GHQによる日本語の制度改革が行われ、旧かな遣いというものが、追放されていきます。要するに、明治からずっときた文献が読めなくなっていく。そういった中で、塚本さんは全部、旧かな遣い、正字ですよ。正字と旧かな遣いが教育の上で、ジャーナリズムの上で追い払われた

状況下で、塚本さんはそれを使った。ひとつの反抗、反時代的な運動なんだね。

そこまできちんと読み込まないと、せっかく塚本さんがやってきたことが、全部空しくなってしまうのではないかと僕は思うんです。

●戦後フェミニズムの歌

岡井 六〇年代以降の「いま読んでおきたい短歌」ということでまずはフェミニズム。広く考えて、女たちの歌というのが一斉に出てきた。それこそ、かつて女人禁制だった「アララギ」に対する、いちばんはつきりとした反抗だったんじゃないかと。

どこかさめて生きていそうなやましさはわれらの世代の悲しみなりき

道浦母都子

「世代」なんです。この人は八〇年から、七〇年安保のことを言っているんですけど、安保闘争をやったあの世代というのは、これも負け戦ですから、何かさめてい

るようなやましさを持っている。世代感覚

というのかな。

産むならば世界を産めよものの芽の湧き立つ森のさみどりのなか

阿木津英

阿木津さんは、石田比呂志という先生であり恋人である人由来のアララギ系「未来」からきた自然詠と言ってもいい。その自然詠の上に「産むならば世界を産めよ」と。

これは何のことを言っているのかというと、当時、女性は子どもを産む性であり、男はそれができない性であると、かなりはつきりとしたわけ方をした。それに対する反論なんだよね。産む性だと言っているけれど、どうせ産むなら世界を産んだらどうだ、と大きく出たわけだね。

永井陽子さんというのも面白い人で、この人はアララギ系でもなんでもない。

べくべからべくべかりべしべきべけれ
すずかけ並木来る鼓笛隊 永井陽子

「べくべからべくべかりべしべきべけれ」、

これは文法の基本だよ。それをひとつのリズムとして使っている。永井さんはもう亡くなられましたけれど、今もよく読まれている人です。

半開きのドアのむかうにいま一つ鎖ざれし扉あり夫と暮らせり 栗木京子

『中庭』という有名な第二歌集があります。地方公務員として公立病院の医師をしている夫と、そこで一緒に住んでいる妻の立場から、ひとつの男女関係、夫婦関係というものに対して、非常に冷めたとも言えるし、理知的とも言える目を開いている。

殺してもしづかに堪ふる石たちの中へ
中へと赤蜻蛉 ゆけ 水原紫苑

男たちがまず作り得ないような歌がフェミニズム的な女歌として出てきた。その先に億万智現象が出てきた、ということだと思います。このフェミニズム的な女たちの歌について、穂村さん、どう思いますか？
穂村 ここに挙げられた方は、そういう流れなんですね。栗木さんはちよつとちがう

かなと僕は思います。河野裕子さんはフェミニズム的じゃないですよ。女性の産むことの重要さ、家族の大切さ、夫が大好き、というような……。戦後短歌において、フェミニズムは主流になり得ていないと思うんです。

岡井 ほう、なるほど。

●「河野裕子現象」

穂村 主流は河野裕子、栗木京子、小島ゆかり、米川千嘉子。この人たちはみんな家族を持っていて、子どももいて、それを歌に反映させてくる。もちろん、言語感覚はみんな一流だけど、それと同時に実人生がちゃんとバックボーンにある歌です。それが歌壇には喜ばれていて、その逆の流れというのは、阿木津さんもそうだし、水原紫苑さん、永井陽子さん、紀野恵さん。この人たちは実人生的なバックボーンをあまり出しませんね。

いくらフェミニズムを通過したと言っても、どこかで歌壇全体の男性原理はすごく分厚くて、歌の中に実人生がちゃんと込められて、歌集の中で家族揃って年を取って

いくものでなくては主流とみなさないというような雰囲気があると思うんです。

岡井 おおかた河野裕子側というのかな。

でも僕は、読んでいるとフェミニズムの歌のほうが面白いです。

もう文庫本にまでなつて「河野裕子現象」というところまでいっちゃっているけれどね。河野さんはテクニクの非常に上手な方で、いろいろと工夫して新しい歌を作った人でもあるからね。僕のように河野裕子さんと一緒に語り合ったり痛い目にあつたりした人間からすると、常識的な河野裕子観で包んでしまうのも、ちょっとね。今の河野裕子現象は、河野裕子の本質を完全に捉えているのかどうか。永田さんがあいう形で出しているから、僕は何も言うつもりもないけれど、そこそ裕子さんが現れて「そうなんだけど、仕方ないよね」と言うんじゃないかな（笑）。

穂村 誰かの意思じゃないから怖いんです。誰かが岡井さんの逆を強く言っているわけではない、全体としてそう流れている。歌集も、どんな青春歌集であれ一冊目はいいいですよ。でも五冊目、十冊目となつたときに、単純に登場人物として夫がい

て姑がいて子どもがいて、子どもが骨折して、夫がなんだか帰って来ない……となる歌集のほうが、面白い。水原さんや紀野さんや永井さんは、たとえ五冊目であろうが十冊目であろうが、「赤とんぼが石の中に入っていく」というようなことがくり返されるわけですよ。

岡井 そうだね。永井さんも水原さんもそうだけど、第一歌集が出たときは非常に新鮮なんだけれど、続かないみたいだなあ。あれは、どうしてなんだろうね。

穂村 やはり言葉だけだと、どれほど言語感覚があつても続けられないのでしょうか。

逆に、実人生派の人は、最高傑作が第一歌集ではなく、もうちょっと脂がのつたあたりになるかな、という印象があります。

岡井 短歌というものは「実物の自然・自己一元の生を写す」という写生がいちばんお似合いの詩形だということですかね。

穂村 いやあ、それは絶対に言いたくないですけど、実人生による緩やかな復讐のようなものを私も感じるし、水原さんのような人たちは感じざるを得ない。岡井さんは例外的に、ラジカルな実験性と共にアララギ的なバックボーンがあつたので、「岡

井隆の弱さの魅力」がある。岡井隆というのは、はじめは非常に強い人、戦う男というイメージです。

飛ぶ雪の確氷をすぎて昏みゆくいま紛れなき男のころ

という、戦いに行くような孤独な人間像だった。それからずっと岡井さんは魅力をどんどん変化させた。僕は、岡井さんは弱さとか迷いというものを外に出すことで、言葉に力を与えたなと。これは「後期岡井隆」です。

嗚呼迷ふ迷へとことん迷ひ抜けレモンをしぼるその時の間も

これはセクシーな歌だと思います。何を迷っているのかはわからないけれど、「どうせ迷ってしまう。断言できない、決められないんだ。とことん迷い抜け」と。下の句の修辭がすばらしいですね。「レモンをしぼるその時の間も」と。何にしぼったんだらう。秋刀魚ですかね（笑）。

ともかくも四時間眠りえたること力のもとの無糖ブラック

「無糖ブラック」というのは缶コーヒーの名前だと思います。本当なら、八時間たっぷり眠って十分な準備をして事に当たりたい。誰でもそうですよね。だけど人生は、なかなかそうはいかなくて四時間しか眠れなかつた。でも、それを逆に考えて「四時間しか眠れなかつた」のではなくて「ともかく四時間は眠ったじゃないか。この不十分な睡眠で俺は今日、がんばるしかないんだ。そのために、俺にはこれがある」と。それが缶コーヒーというのが情けない（笑）。「ここが岡井さんのうまいところだね。これが「ブランデー」とか「キリマンジャロコーヒー」とか、いいコーヒーや高いお酒じゃだめなんですよ。四時間の睡眠と、誰でも買える百何十円かの「無糖ブラック」というしょぼい缶コーヒー。「これで俺は今日一日を戦うんだ」というところにたまらないセクシーさが宿る。これは近年の岡井隆の技ですよね。

●ニューウェーブの歌人たち

岡井 次に「ニューウェーブと俵万智現象」として挙げてみました。

荷車に春のたまねぎ弾みつつ アメリカを見たいって感じの日だね

加藤治郎

穂村さんの歌はいくらでも挙げられますが、ハープテイーの歌を挙げました。

ハープテイーにハープ煮えつつ春の夜の嘘つきはどらえもんのはじまり

穂村 弘

恋人と積むよろこびもかなしみもぼほぼほぼとしか思はれず 萩原裕幸

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日 俵 万智

九十年代に、穂村さんたち「ニューウェーブ三人組」が出てきてから、ちょうど四半世紀が過ぎた。「現在の若手歌人数人」

には、斉藤斎藤、永井佑、野口あや子を挙げておきました。

お名前は何とおっしゃいましたっけと言われ斎藤としては斎藤とする

斉藤斎藤

日本の中でたのしく暮らす 道ばたでぐちゃぐちゃの雪に手をさし入れる

永井 佑

くびすじをすきといわれたその日からくびすじはそらしかたをおぼえる

野口あや子

僕が見ていると、ニューウェーブ以降はこういう感じになります。つまり、重々しく人生を問うというよりはライトパスです。もうひとつは、何と言ってもレトリック優先、言葉優先かなあ。「ぼぼぼぼぼとしか思はれず」とか言っている。そして、斉藤斎藤や永井佑の、人生をいかに生くべきか、自然界がこんなに変化しているのだから、これを正確に写実するのだという、つまり斎藤茂吉が言っていたような写生、

あるいは、人生いかに生くべきかということとを問い詰めていくような歌のあり方とは違う、そういったものはニューウェーブ以降、二十五年経って、やはり変わらないな、と。

穂村 バブル期に短歌を追っかけ始めた我々の世代には、それがいちばんないです

よね。だけど、その下の世代、「お名前は何とおっしゃいましたっけと言われ斎藤としては斎藤とする」とか、「日本の中でたのしく暮らす」というのは非常に奇妙だけれど、これは「人生いかに生くべきか」に對する彼らなりの宣言のように見えるんです。

岡井 そうだね、考えてみると。

穂村 私は、この人たちは岡井さんたちの色を、まったく別のかたちで引き継いでいると思います。

岡井 そう言われると、ここには三人しか挙げなかったけれど、たしかに何人もいますね。

穂村 野口さんの「くびすじ」の歌も、ある女性の流れの歌として、身体感覚が通じる歌じゃないかと思えます。

岡井 そうだね。今日は何をしゃべって

たのかさっぱりわからない。自分の言い訳をしていたと思うけど（笑）。

「アララギ」の男性から始まって前衛短歌があつて、そして九〇年代以降。短歌そのものが、かなり大きな共通項を持ちながら、また繰り返し繰り返し、時代とともに甦ってくる。

この短歌史というものは、俳句の世界にも詩の世界にも、小説の世界にもないような、ひとつの面白い現象です。自賛するつもりはないけれど、良かったなと僕は思っています。

穂村 長くやっている、また違う面白さが出てきますね。

岡井 そうですね。

